

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.68 2014 年 10 月 11 日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369

第 17 回文化の仲間定期総会開催

今後もしつずつ前進していく決意を込めて

文化の仲間事務局 山木 健介

9 月 28 日 (日)、第 17 回定期総会をスペース京浜 (京浜協同劇団稽古場) で開催しました。1996 年 9 月 1 日に発足してから 18 年が過ぎました。

劇団公演のお手伝いをしたり独自の企画も実施して来ましたが、『結成宣言』にある「この稽古場を、地域文化の砦にしていけます」までには至っていません。今後もしつずつ前進していく決意を込めて 1 年間の総括と今後の活動を話し合いました。

総会での主な意見は、「新しく入った人 (会員) の歓迎の催しとか、せつかく入ったのだから何か楽しいことを。新しい人の情報が知りたい」「会員名簿を見て、息子と娘が入っていないことに気付いた」「文化の仲間の活動は非常にユニークなので、もっと広く紹介した方が良い」「福島公演があったので、劇団と文化の仲間の交流レクリエーションを中止したが、福島で交流ということで取り組んでも良かったのではないかな」「レクリエーションは来年はぜひ企画してほしい」「送迎バス無料で 1 泊 1 万 2000 円という静岡の宿もある」「公演のたびに文化の仲間のチラシと入会申込書を公演パンフレットに入れた方が良い」「会報はほんとに見やすい。場合によっては劇団で買い取って活用しても良いのではないかな」などの意見がでました。

活動方針では、来年 1 月 12 日 (月・祝日) に地域の子供たちを集めて「お正月お楽しみ会」を開催すること、劇団との交流レクリエーションの実施、花火納涼会の実施などを決めました。

役員改選では、尾崎隆一さんが病気治療のため退任

されましたが他は留任しました。世話人は、二村柊子・高橋明義・藤崎秀子・山木健介・須田セツ子・西川日女子・小野寺晃・佐藤友吉・常名孝央 (敬称略) の 9 名です。

総会の最後に全員で「文化の仲間のうた」を合唱し、元気を出して閉会しました。

総会後の「記念講演」は、82 歳で現職産婦人科医の野末悦子さんのお話をうかがいました。

今年 60 回を迎えた日本母親大会が 8 月に横浜で開催されましたが、母親大会に参加したことはあったが、主催者側になったのは初めてということで、主催者側から見た母親大会のお話をいただきました。憲法 25 条に「文化的な」とあるが、今の日本は文化的なのだろうか？ 私たちが文化国に変えるようにしなければとおっしゃっていました。また神奈川女性九条の会のことや、高齢でも元気に活躍されている女性たちとの親交についてや、医者をめざした理由など講演内容は多岐にわたりました。拝聴していて、とにかくパワフルだなと感じ圧倒されました。82 歳であれだけパワフルに生き活動したいものだと思った記念講演でした。



総会での野末先生の記念講演

福島で飛翔！「空の村号」

和田 庸子

素敵な公演でした。あの「空の村号」が福島で大きく羽ばたきました。

昨年夏、文化の仲間と劇団の共同企画「腹の底から憲法でいこう」で、川崎から飛び立ち、今年は、全リ演主催の「全日本演劇フェスティバル in 福島」での上演となりました（演出・和田庸子／制作・石川房乃／舞監・渡辺高志／音響・柳沢芳信／大道具・伊藤厚／装置・護柔一）。京浜企画とはいえ、5劇団と個人会員含めて10名の出演者が顔を揃え、音楽の安達元彦さんも自らキーボード奏者として出演して下さいました。

客席が暗くなり「新相馬節」のクラリネットが静かに響き始める。そう、ここは唄の故郷……カランカランと始業の鈴が鳴って登場人物が舞台に集まり、半円形にならんだ10個の椅子に座る。「ドラマリーディング・空の村号！」タイトルコールの後、楠木空の朗読「ぼくの夢……」が始まった。今回の空くんは、劇団よこはま壺座の新人・三橋巧くん、18歳。海ちゃんは埼玉の伊藤節子さん、お父ちゃんは創芸の萩坂心一さん、お母ちゃんは青年劇場の伊藤かおるさん。おばあちゃんは壺座の川西玉枝さん。酪農家の仲良し5人家族が原発事故をきっかけにひきさかれていくドラマを、脚本家の篠原久美子さんは長男・空の視点でいてねいに描いています。わが劇団の新人・加藤泰宏くんも、海ちゃんに「大好きだ！」と叫び、ガガゾゾボンバーもやるツヨシ役。バイトをやりくりして演じ切りました。

今回は間口も奥行も大きい舞台だったので、どんなふう空間を使ってリーディングを展開するのかがポイントのひとつでした。稽古場での公演と一番違った

のは、ラストです。水平線を使って青空が広がり、大きなこいのぼりが泳ぎ、白い雲を浮かべました（装置・護柔一）。出演者全員が立ち上がり、最後にもう一度「新相馬節」が……。会場の方々、福島に生きる人々の心にも何かが届いたのでしょうか。

公演にかけつけてくれた小林清子さん（以前、鹿島田で豆腐店を営んでいたが今は故郷の福島市に在住）は「朗読だって言うからただ読むだけだと思ったら、動きがあって、太鼓やいろんな音があってオモシロかったヨ。笑って泣いた。なんでもっと福島の人に宣伝しなかったの？ 飯舘村の人（ドラマのモデル地）を呼ばなかったの！」私は思わず聞き返しました。「飯舘村の人に観てもらっても大丈夫かな？」「絶対感動するよ、ホントに良かったよ」……



後日、劇団土くれの安原さんは「オレは芝居を観てもあまり心が動かない人間だけれども、今回は感動したなあ」。「全リ演のフェスティバルとして、『空村』で締めたことがとてもよかったと思う」と述べて下さったのは、浜松・からっかぜの布施さんでした。

青年劇場の伊藤かおるさんは「それぞれ違う創造習慣でありながら短期の集中で一つの舞台をつくる醍醐味がありました。本番の舞台は、出演者全員が観客に現段階の最高のものを届けていたと思います。客席からの素直な反応が私たちを乗せてくれ、良いアンサンブルを奏でさせてくれました。惜しむらくは、もっと観客が……。演出を中心に、役者もスタッフも全員粘り強く戯曲に挑戦したことに感動しています」と参加した感想を寄せて下さいました。

5劇団10人が「福島で、この作品で、心を通い合わせたい」と願って、真夏の稽古に必死で取り組んだ結果、このような感想をいただき胸をなでおろしています。他に、関東ブロック主催の「貧乏物語」（劇団から瀬谷さんと稲垣さんが出演）、福島県立光南高校演劇部の「この青空は、ほんとの空ってことでいいで

写真：油上恵子、以下同



すか？第二章ばらあら、ばらあ」、西会議合同公演「天満のとらやん」の4作品が上演されました。

残念に思ったのは、午前中素敵な演劇を見せてくれた光南高校演劇部のみなさんに「空の村号」を観てもらえなかったことです。遠隔地なので夜6時からの開演では帰れなくなってしまうとのことでした。「ワー、

残念！」とエールをかわしました。

今回の「全日本演劇フェスティバル」は福島のお客様への宣伝や、新田満さんの講演を含むプログラムの組み方など、具体的問題でいろいろな課題が残ったようです。今後の全り演のあり方を考えていく良いきっかけを作ってくれたのではないのでしょうか。

8月15日 花火交流会

笑って花火を見られるのも平和であってこそ

常名 孝央

アジア太平洋戦争終結から69年目となる8月15日、毎年恒例となった多摩川の花火観賞が劇団屋上で催され、文化の仲間や劇団員など延べ30人が参加して大いに賑わいました。

会場となった屋上は、午前中からのスタッフの尽力で立派な仮設屋台村となり、本格的な焼鳥、焼き魚、野菜焼きなどが大量に振る舞われ、花火が始まる前から大いに盛り上がりました。用意されていた日本酒やビールに加え、差し入れのお酒も楽しい雰囲気の花を添えたようです。これだけの本格料理に美酒飲み放題で1500円とは、赤字が出ないだろうかとちょっと心配になってしまうほどでした。とにかく大満足です(会の財政再建のためにも、来年は2000円以上にすべきと提案しようか…)

肝心の花火は7時40分にスタート。前日の雨が当日まで続くのかと心配されていましたが、みんなの気持ちは雷様にも通じたのでしょうか。当夜は雲ひとつなく、劇団屋上には多摩川からの涼しい風が流れ、絶好の花火日和となりました。

文化の仲間の年中行事ですが、花火の主催は川向こうの大田区です。大会の正式名称は「大田区平和都市宣言記念事業『花火の祭典』』というそうです。なんでも、大田区は1984年に平和都市宣言して、その3年後からこれを記念して花火の祭典を行っているとのこと。今年は宣言から30周年という節目の大会でした。当日の打ち上げ総数は5000発、河川敷への見物人は12万3千人にも上ったそうです。

実はわたしは生まれも育ちも大田区で、現在も大田区在住なのですが、こうした平和事業の一環として花火大会が行われているとは全く知りませんでした。

大田区に住んでいると、福祉は23区で最低レベル、

無駄な蒲葎線計画、羽田空港の騒音化、最近ではセクハラ野次の議員など、良くない面ばかりが目につくのですが、わたしたちが納めた地方税が平和の祭典に使われていたことを知り、少しだけ誇らしい気分になりました。花火大会のほかにも、8月中旬には広島と長崎の平和祈念式典に合わせて、区役所1階で原爆に関するパネル展を毎年実施しているとのことでした。

お酒を呑んで、おいしいものを食べて、みんなで笑って花火が見られるのも、やはり平和であってこそ。以前、ナイジェリア出身のタレント、ボビー・オロゴンさんが日本で初めて花火の音を聞いたときのことについて「戦争が始まったかと思って、とっさに伏せてしまった」とテレビで語っていました。日本人で花火の音で戦争だと思ふ人はまずいないでしょう。ふいに爆発音がしたとしても、何かの爆発と思っても、戦争とは考えないはず。それが普通感覚であることは、日本人が69年かけて育ててきた財産だと思えます。なかにはそれを「平和ボケ」という人がいるかもしれませんが、武力で命が守れると考えている人こそ平和ボケと言いたい。戦争を身近に想定しないで暮らせる社会が長く続くことを願ってやみません。

この国に暮らす者の心に染みついたDNAなのではないでしょうか、花火を見るときなぜか平和について考えてしまいます。

(文化の仲間世話人)



劇団屋上の「仮設屋台村」で

目からウロコをパラリと落としてくれるのがアマチュア

安達 元彦

「真のアマチュアリズムとは？」が改めて深甚な劇団的課題となったのは小田健也さんの鋭いアプローチによってだったと思います。小田さんの演出で劇団は1975～80年にかけて『コーカサスの白墨の輪』『金冠のイエス』『母（おふくろ）』など、大作話題作を矢継ぎ早に生み出しました。外部のひとりの専門家にこれほど長期間集注して食らいついたのは劇団史上唯一だったのではないのでしょうか。このテーマがどのように議論されたか、ぼくは詳しくは知りません。ただ、ここでは「観る側からのアマチュアリズム」について考えてみたくなりました。

客からすればアマチュアは「生活綴り方型」か「学芸会型」です。「生活綴り方型」は自分たちの暮らしの中から世界を視ていこうとし、「学芸会型」は自分たちとは違った遠くからの視点を借りて暮らしを考えて行こうとする。「生活綴り方型」はしばしばホンモノが登場する。看護師さんが看護師の役を、先生が先生の役を、坊さんが坊主の役をやる。「学芸会型」も役より役者で、王様役の大工のトシさん、お姫様をやる蕎麦屋のヨウコちゃんが眼目なんです。いずれにしろ助手見手ともに生活実感上お互いさまだから、とてもヒトゴトならず、思わず身を乗り出して舞台と一緒にハラハラしたり溜息ついたり時には泣いたり笑ったり——対等な人間同士としてのリアルタイムの共生感を持ち合う。

プロは「芸術鑑賞」か「エンターテインメント」。「芸術鑑賞」の場合相手が権威ある高名者だと恐れ入って観させていただき、無名の新人には俗流批評家みたいな目線になる。「エンターテインメント」でも有名タレントだとファンという下僕になり無名者にはダンナ風を吹かせる。いずれも見手は受け身で背もたれに体をあずけ、腹の底ではチケット代を天秤に懸けている。だって、売れてギャラの高い人がエライ人うまい人た

いした人、無名でギャラの安いのはヘタでたいしたことないヤツと思いこんでな～い？

でもヘンだなあ？ 最初からこんなだったのかなあ？

芝居ではないけれど、瞽女唄や津軽三味線を囲んだ昔の村人たちは、無論プロだからゼニはからむけど、憂き世に同じく棲む者としての深い同時代感を、ゼニを超えて仕手たちと求め合っていたのではないかと妄想？ だってそんなことがなければ芸が生まれて育つわけがない、と私は強引にそう思う。

どうも——妄想ついでに言うけど——現今のプロと客との関係は、私たちが資本主義のカラクリに骨の髄までからめとられ、人間同士をも値踏みしあうように無自覚のまま（無自覚だから余計タチが悪い）コントロールされているゆえではないか？

こういうように曇らされた私たちの目からウロコをパラリと落としてくれるのがアマチュア。そして、こうしてウロコが落ちた目には、もうプロもアマチュアもない。あるのは芸だけ。私たちが生きる上になくはならないものとしての芸そのものが真裸で洗われたように現前してくる。「芸にはプロもアマもない」とは本来こういうことだと思う。現今の世の中でこういうことをもたらしてくれるところにこそアマチュアの真の働きはあるのだと思う。



1980年（写真：©長坂クニヒロ）

次回公演「親の顔が見たい」

いじめの根っこを探る

京浜協同劇団 城谷 護

京浜協同劇団は創立 55 周年記念公演の第 2 弾として、畑澤聖悟作の「親の顔が見たい」を内田勉演出で上演することにしました。公演は 11 月 21 日から 12 月 7 日まで、3 週連続で金・土・日にスペース京浜（京浜協同劇団小劇場）で行います。10 回の上演で 1,000 人のお客さんを目指します。

ものがたり

舞台はあるミッションスクールの女子中学校。2 年 3 組の井上道子はいじめが原因で自殺を図る。遺書にはクラスメート 5 人の名前が書いてあった。その子の親たちが学校に集められる。「うちの子に限って……」といじめへの我が子の関与を否定する親たち。しかし、そこへ道子が生前に投函したらしい手紙が届く。……

いじめの実態を描き、どうすればいいのかを私たちに考えさせてくれる問題作です。

作者は現役の高校教師

作者の畑澤聖悟氏は青森中央高校の現役の教師です。同校の演劇部は全国高校演劇コンクールで 3 度も最優秀賞を受賞、日本一に輝いていますが、その演劇

部の顧問なのです。

一方、劇団渡辺源四郎商店の店主でもあり、劇作家、演出家として幅広く活躍中の人でもあります。楽しい中にも鋭い問いかけの作品がこの作者の特徴です。

それだけにこの作品にはドキッとするいじめの実態が赤裸々に描かれています。いじめ問題は確かに目をそむけたくなる面もあります。しかし、避けては通れない社会問題でもあります。事実を隠したり、あったことをなかったとする政治状況にも警鐘を鳴らす作品となるでしょう。

私たちはこの作品を通して観客の皆さんと一緒に考えたいのです。この話題作どうぞ、お見逃しのないよう、お勧めいたします。

上演予定

	11 月						12 月		
	21 日	22 日	23 日	28 日	29 日	30 日	5 日	6 日	7 日
2:00 開演	○	○	○	△	○	○	○	○	○
7:00 開演	△	△	△	○	△	△	○	△	△



京浜協同劇団 第 87 回公演

親の顔が見たい

作 畑澤聖悟 演出 内田 勉

日程 (完全予約制/受付中)

2014 年 11 月 21 (金) ~ 23 日 (日) 11 月 28 日 (金) ~ 30 日 (日)

12 月 5 (金) ~ 7 日 (日) 上演時間は上の表を参照

会場 スペース京浜 (京浜協同劇団小劇場)

前売料金 大人 2,900 円 シニア (70 歳以上) 2,200 円 ユース (30 歳以下) 2,200 円

学生 2,000 円 (障がい者の方は事前にご相談ください)

全席自由席 開場は各 30 分前

[お申込み・お問合せ] 京浜協同劇団 TEL. 044-511-4951 FAX. 044-533-6694

HP: <http://www.keihinkyoudougekidan.com>

メール: keihinkyoudougekidan@nifty.com

女子中学生、道子が自殺した。遺書には 5 人の級友の名前が書いてあった。親たちが学校に呼び出される。どの親も「うちの子に限って……」と関与を否定するが、そこに道子が生前出したらしい手紙が届く。さあ、たいへん……

◎文化の仲間通信◎

◆大田たまがわ九条の会 秋の講演会

「海は広いな大きいな」

日程 10月23日(木) 18:45 開演

会場 大田区民プラザ(下丸子駅前)

参加費 700円

講師 アーサー・ピナード

問合せ 事務局・小林 090-6109-6273

日・米を生きる詩人が語る日本の平和と憲法——この日本列島を海から見つめるとどんな国なのか。沖縄の海と福島は海は今、なにを伝えようとしているのか。

◆第25回 子どもの未来をひらく川崎集会

日程 11月9日(日) 10:00~15:30

会場 法政大学第二中学高等学校(武蔵小杉駅)

資料代 500円(高校生以下無料)

開会セレモニー・講演 池田佳代子さん「100人の村 あなたもここに生きています」

午後 ワークショップ・分科会 子どもに安心なおやつを/ようこそ絵本館へ/みんなであそぼうよ/楽しい小学生の子育て/中高生が豊かな思春期を過ごすために/特別な配慮を必要とする子どもたちへの支援/不登校を考える/小学校の教科書はどう変わったの? ほか

問合せ 事務局 船津 了 044-434-4290

◆ゆめりあコンサート vol.13

つれ ふたたび~たつの素子さんを偲んで~

日程 11月14日(金) 19:00 開演(18:30 開場)

会場 大泉学園 ゆめりあホール

チケット 前売 3,000円/当日 3,500円

中学生まで& 75歳以上 1,500円

出演者 安達元彦・合唱隊「つれ」/岡田京子(作曲)とめだか大学/石毛佳世子/波多野信子/熊倉正博/鈴木たか子/ドイツ平和村をサポートする会/東京土建練馬支部合唱団「コスモス」 ほか

問合せ・申込み 加藤耕平 080-6652-7721

◆川崎市民劇場第323回例会

劇団朋友公演 真砂女

日程・会場

たま・あさお市民劇場 12月18日(木) 18:30 多摩市民館

市民劇場なかはら 15日(月) 18:15

16日(火) 13:30 エポック中原

さいわい市民劇場 20日(土) 15:30 幸市民館

作 瀬戸口郁/演出 西川信廣/出演 富沢亜古・本山可久子・小島敏彦・菅原チネ子 ほか

鴨川の老舗旅館の娘として生まれた鈴木まさ。96

歳まで恋の句を残し、封建的な家制度や男の身勝手さに翻弄された一人の女性の生きざま。波乱の人生を俳句とともにしなやかに生き抜いた女流俳人・鈴木真砂女の半生を綴る。

申込み・問合せ たま・あさお市民劇場 044-911-6920

市民劇場なかはら 044-455-7950

さいわい市民劇場 044-244-7481

●事務局からお願い

2014年分の会費の納入がまだの方は、納入をお願いします。対象月は1月~12月で3600円、家族会員の方は5000円です。

城谷護さんが川崎市文化賞

劇団員城谷護(腹話術の芸名はしろたにまもる)さん(73歳)が、平成26年度川崎市文化賞を受賞することになり、9月16日に市長の記者会見で発表されました。推薦者は川崎文化会議の関昭三副議長。

受賞理由(要旨)は、(1)55年間京浜協同劇団での活動をはじめ川崎の市民演劇をリードしてきた。(2)数少ないプロの腹話術師として活躍、被災地へのボランティア公演は300回以上。(3)市社会教育委員など市の各種委員や市民文化団体の役員を数多く務めてきた、というもの。

同時に受賞する人は、劇団民藝の代表で女優の奈良岡朋子さん(84歳)、川崎市文化財団元理事長、川信元理事長の寺尾嘉剛さん(79歳)、団体では民家園のボランティア団体「炉端の会」です。

授賞式は11月10日、国際交流センターで行われる予定です。

なお、京浜協同劇団は1981年に団体としてこの賞を受賞しており、このときは初代代表の黒沢参吉さんが逝去される1年前で、クロさんは病を押して授賞式に臨みました。

■文化の仲間ギャラリー■

小野寺 晃⑭

